

ニューオーリンズと三宅島をつなぐ風

～災害に学ぶプロジェクトニュース5月01日号～

様々なプログラムを提供しているチャーター・スクール、ベトナム系アメリカ人のコミュニティ、低所得者用の公営住宅の再建、今日もギッシリと詰まったスケジュールだった。途中、渋滞にまきこまれたり、エレベーターで閉じ込められそうになったり、エアコンが壊れ蒸し風呂のような部屋でミーティングを行ったりと、思わぬ出来事にも遭遇したが、多くを学び考えさせられた、実りある一日でした。

(佐々木)

生春巻きに巻かれるアメリカ?

プロジェクト 3 日目、ニューオーリンズ特有の蒸し暑い朝。ニューオーリンズ中心部から東の湖の方に向かうと、スワンプ（湿地帯）の中に小奇麗な集落が現れる。12 歳でベトナムから米国に渡ったヴィエン神父によるメリー・クイーン・ベトナム教会を中心としたベトナム人コミュニティだ。所々にあるアジア的な建築様式、見慣れた顔つきの人々、私たちもなぜか安らぎを感じる。

ニューオーリンズには、多くのベトナム難民が渡ってきた。フランスからの強い影響を受けてきたニューオーリンズは、同じくフランスの植民地であったベトナムの人々にとっても、過ごしやすい地域であったらしい。ビジネスや農業、漁業を営みながら肩を寄せ合って暮らしている。

カトリーナにより、この地域の人々も避難生活を余儀なくされた。アシェのアフリカン・アメリカンの人々と同様、「マイノリティー」である彼らにとって、災害は地域コミュニティの崩壊と独自の文化の喪失をも招きかねない。しかしヴィエン神父は若者を中心に地域の方々と共にこの問題に果敢に挑み、見事に再生、いやむしろこれを機に、しっかりとこの地にベトナムの根を張ろうとしているのだ。

ビジネス、農業、漁業、医療、教育、コミュニティ作り、高齢者福祉……。様々な課題に対し、優秀な若者たちがリーダーとして関わり、ヴィエン神父の力強いリーダーシップが実に斬新で先見性のある取り組みへと導いている。更には、子どもから 90 歳を越える高齢者までが互いに交わる活動の場を持ち、ベトナム人コミュニティは、更に強い結束力を備えつつあるという印象を受けた。

「self sufficiency」これが彼らのキーワードだ。直訳すれば「自給自足」となり、実際に彼らは農産・水産物の大半を自分たちでまかない、次の災害の時には 1 ヶ月は自分たちの力だけで食料を確保で



ヴィエン神父は、農場や漁港にも同行して、地域の現状とともに自らの現在の取り組みとこれからの構想を熱く語ってくれた。(写真前のヒゲのおじさんがヴィエン神父)



教会内で生春巻きをご馳走になった

きるように取り組んでいる。しかしこの言葉の意味をもう少し広く捉えるなら、経済社会の仕組みの波に流されることなく、祖国から受け継いだ様々な智慧を生かしながら、新しい価値観を主体的に模索する、まさにマッカーシー氏のファーマーズマーケットの思想との共通性をも見出すことができる。単にアメリカ社会に帰属する

だけの「ベトナム人」から、「ベトナム系アメリカ人」として社会へのオーナーシップを持つ自信に満ち溢れた人々の存在があるのだ。

昼食は教会でおいしい「生春巻き」をご馳走になった。その味わいを楽しみつつ、復興に果敢に取り組むこの人たちのダイナミックな生き方に、アメリカらしい側面の一つを垣間見ることができたように思う。生春巻きにアメリカを上手〜くマキマキ。ヴィエン神父のこの勢いは、満腹感がさらに増すほどであった。

(山根)

被災者の住宅問題

セントラル・シティ・パートナーズ(CCP)という民間団体は、ニューオーリンズ都心近くの、最も古く最も治安が悪いといわれていた公営住宅地域(CJ ピート)に、公的な住宅を 460 世帯分提供するプロジェクトに取り組んでいる。公的な住宅だから、公園はもちろん幼稚園年中組から中学 2 年までを対象とする学校も組み込む。学校にはアフタースクールなどで YMCA も入る。入居者として想定されているのは、市場家賃で入居する層、公営住宅家賃で入居する層、その中間層のミックスである。

三ヶ月前に来たときは、たくさんの公的住宅群を厳重にフェンスで囲って警備して誰も入れないようにしていた。今回はほとんどが解体されて瓦礫の山となっていた。ニューオーリンズの復興はなかなか進まないように見えるが、ようやくここは進み始めたようだ。プロジェクト責任者のエスコフェリーさんの表情も数か月前に比べると明るくなったように感じる。

アメリカでは一般に公的住宅のイメージが悪い。スラム化し、犯罪の温床になり、不法入居がはびこっている。自治会がしっかりしていて管理が行き届いている日本の公営住宅のイメージとは違う。だから入居者を複数の所得層によるミックス構成にせざるをえないわけである。コミュニティのあり方としてもそのほうがいだろう。

問題は、住環境を改善して従前居住者数を確保できないことだ。もちろん、戻って来たいのに戻って来られない人が多ければ勘定は合うわけだが、そういう安易な考え(青山)方をとらず、disaster housing assistance program によって、丁寧に相談にに応じているのが特色だ。



住宅問題は被災者に対する生活支援の根幹をなす。エスコフェリーさんのプロジェクトが一日も早く達成されることを切に祈りたいと思う。

(青山)

歴史的建造物として記念館となるCJピート内の一棟

リバーガーデンのリス

ニューオリンズのメシは「最低？」だ。滞在4日目、ベトナム村の“ソーメン”でやっとひと心地ついた。メシのことを除けば、しかし、ニューオリンズは最高だ。郷愁という言葉がふさわしいかどうか…。この懐かしさは何なんだ、と思う。

ジャズバンドを先頭とした「野辺送り(セカンドラインというらしい)」の列がズンジャカと過ぎていく不思議な街。主を失くした豪邸とそれを覆う檜の巨木の静かな佇まい。それは動物の形をした森のようでもある。おもちゃのような“バルコニー”が整然と区画されて並び廃墟のような街の物悲しさ。高速道路下で身を寄せ合うホームレスたち。ミシシッピの豊かな水が織りなす湿地帯の果てしなさ…。それら全てにニューオリンズという悲しみと怒りが静かに漂い流れている。遠いアフリカを源流としたジャズの律動とともに。

カトリーナは、この街に“変化”をもたらした。その変化の受け止め方は様々だ。受け止めきれずに戸惑う人々が多い中で、自らが理想とするチャータースクールに邁進する教師たち。更地となった公営住宅跡地に新しい町を作り始めた人々。ベトナム村としての発展を目指す“ベトナム系米国人”。

リバーガーデンアパートメントは、どうやらニューオリンズの新しい街の象徴のようだ。道を中心とした区画、団地周縁にも開かれた街を、設計者たちを自負する。確かに美しく区画され、一つひとつの建物もゆったりと設計されている。しかし、都市というものは“光の部分”だけでは成り立たない。人はわがままで。区画されれば、区画されたくない気持ちが必ず生まれる。その気持ちを包み込んでこそ、都市は豊かな相貌を見せるはず。リバーガーデンのリスを追いかけながら、そんなことを思った。残念ながら、シャッターチャンスは逸してしまったが…



リバーガーデンアパートメントの住宅群。全てパステルカラーに彩られた新築住宅だった

人をつなぐ。

ニューヨークを本拠とする日米文化交流団体のジャパン・ソサエティーが三宅島とニューオリンズを結んで「災害に学ぶ」をテーマとす

【5月01日行程】

- 午前 レイクフォレスト・チャータースクール 施設見学
- メリー・クイーン・ベトナム教会
- ヴィエン神父・スタッフとの意見交換
- ベトナムコミュニティ見学
- 午後 市内公営住宅見学
- リバーガーデンアパートメント見学
- CJピートコミュニティセンターでの意見交換

るプロジェクトを共催する、何か唐突な感じがするかもしれませんが。4月29日、晴れ晴れと抜けるような青空のニューオリンズで再会したロザンヌ・ハガティと青山先生を見ながら、今度もまた、お二人との出会いが、ユニークなプロジェクトに発展した経緯を思い出しました。

ホームレス支援で強力な運動を展開するロザンヌが初めて訪日し、彼女の人生で大切な「場所」となる日本に8週間滞在したのはジャパン・ソサエティーの日米リーダーシップ・フェローに選ばれた8年前でした。静かに誠意をこめて人の話を聞き、きずなを大切に彼女の姿勢がたくさん日本の友人を育み、お世話をした私たちに大勢の人資源の宝を分けてくれました。青山先生もそのお一人でした。ロザンヌと一緒に三宅島を訪問し、「風の家」で上原さんや坂上さんに出会い、ロザンヌの紹介で会ったフォード財団のミゲル・ガルシアが青山先生の論文に感激して、カトリーナ災害に結びつけるプロジェクトを提案し、ニューオリンズでのコミュニティ再建に取り組む人たちに自ら引き合わせてくれました。

UNITYのマーサ・ケゲル、青空マーケットのリチャード・マッカーシー、アシェ文化芸術センターのキャロル・ベベル、ベトナム村のヴィエン神父、レイクフォレスト・チャータースクールのマードレ・アール、彼らには共通した資質があるように思います。それは、困難な状況をバネにコミュニティに新しい価値を生み出す強力なリーダーシップと将来の夢を描く前向きな姿勢。これら人材が日本で持つ経験との出会いから新しい可能性を生み出すのではないかと期待しています。

長年、日米間のフェローシップや交流プロジェクトなど人をつなぐ仕事を通じて出会った一人一人がジャパン・ソサエティーにとっても、私個人にとっても、貴重な財産であり、こうした人材が次のユニークなプロジェクトに導いてくれる。このサイクルを続けられれば幸せです。

(川島)



訪問したチャータースクールの廊下に貼り出されていたハリケーン「カトリーナ」についての教材

< 編集後記 >

毎日朝早くから夕方まで、様々な団体の方と活発な意見交換がおこなわれています。これまでお会いした主要な団体は7団体。それぞれがハリケーン「カトリーナ」以前からニューオリンズの地域で活動をなされていて、カトリーナ後から大小の変化こそあれ被災者支援に関わる活動に着手することになった団体ばかりです。

様々な意見交換の中で、頻繁に出でくるのは、「確かに悲しい出来事も多いし、厳しい現状に怒りすら覚えるが、決して悪い変化ばかりではなかった」という声です。三宅島をはじめ、多くの被災地で耳にした言葉だったことを思い出しました。

1000名を超える犠牲者を出し、復興も決して十分でないことにはどなたも憤りを感じていますが、悲しんでばかりはいられないし、少しでも前を向いて、ポジティブにカトリーナ災害を捉えようとしている姿勢に頭が下がる思いです。人が困難に立ち向かう時の姿勢には、国境や人種に関係なく応援したくなります。

明日はいよいよこれまで会ってきた各団体の方々が一堂に会してのラウンドテーブル。どんな意見交換になるのか。とても楽しみです。

(福田)